
犬の話

小宮山譲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬の話

【Zコード】

N4459D

【作者名】

小宮山譲

【あらすじ】

学校事務員の40男である「俺」は一児の父で同僚の図書館司書と不倫の関係。痴話喧嘩で妻を殴り、妻は実家に帰る。「俺」にはちょっとした「事情」から、他者と深く関わることを避ける性癖がある。不倫相手にその「事情」を打ち明けることによって仲は精神的にも急速に接近。しかし妻が戻つてくることになり……。

ヒカルを連れて公園に行つて家に戻ってきたのが十一時半。まだ昼飯は出来ていなかつた。まあいい。俺は殿様ではない。我慢しなければいけない。

女房は二つのカツプラーーメンを俺のために用意していた。一つは幸楽ラーメンのしょうゆ味。もう一つはエースコックのスーパーかつブ濃厚とんこつー・五倍。流し台の上に並べて、どちらにする？好きな方を選ばせてあげる、と言つ。俺がエースコックを指さすと向こうはすかさず賞味期限が幸楽の方が早い。あと一ヶ月しかない。と返す。二ヶ月もあれば十分だ、と言いながら俺はビールの封を破つてエースコックに湯を注ごうとする。待つて、と女房。今煮立つている雪平鍋の湯はヒカルのうどんに使うから。

「あと、もうちょっとだけ」

わかつた。そっちにも段取りというのがある。大人しく台所と続きの居間で、ヒカルを膝に抱いて待つ。丸い合板の折り畳み式の小さな座卓を前にして。ホームセンターで買った星一徹がひとつくり返しそうなこの卓袱台は、案外便利だ。女房の嫁入り道具の白木のダイニングテーブルは危ない。ヒカルが椅子伝いによじ登つて、足を滑らせて頭から落ちたことがあった。たんこぶが出来ただけで大事には至らなかつたが、それ以来椅子は物置にしまつた。椅子なしで立つて食うわけにもいかないので床に座つて食えるように買つてきたのがこの卓袱台だ。白木の食卓は家計簿やメモや食器などの物置き台になつた。

フローリングの床には「ゴムのマット」が敷いてある。子供というのはよく転ぶ。パーさんとその仲間たちの団柄は赤や黄色がどぎついが、店頭にある中で一番分厚かったのでこれにした。家から持つて行つたメジャーで測ると一・九センチ 大して厚くもないか

あつた。

座つてあたりに手を伸ばして朝刊を捲す。床には何日も前の新聞やスーパーのチラシがマクドナルドのハッピーセットのがらくたに混じつて散乱している。今日の日付の入った朝刊を見つけて手に取り、壁にもたれて斜め読みする。景気の好転を日銀が下方修正。産廃不法投棄過去最高全国で七四万トン。幼女殺人犯血液型判明「B型」。勤務態度を注意された上司に石焼きビビンバ鍋を投げつけ頭骸骨陥没。そこで腹がくうと鳴る。ヒカルがそれを聞いてくうと口で音を真似る。そういえば今朝は飯を食つていなかつた。起きるのが遅かったのと忘れていたのと。そんなことを考えているところに女房が出来上がつたラーメンとヒカルのうどんを盆に乗せて運んでくる。蓋を開けると湯が内側の田印の線より一センチほど上まできている。かき混ぜてスープを啜つてみる。ちょっとばかり水くさい。塩辛いよりはヘルシーだと自分に言い聞かす。ついで麺を囁る。硬い。アルデンテ。まあいい。これも。ふにゃふにゃよりは。食つてる間に柔らかくなるだろう。

女房は玄関先で、十二時過ぎには帰つて来て、と俺たちを見送つた。十時過ぎだつた。風が冷たいかもしれないと思つて先週より厚着をして出掛けた。ヒカルにはフリースの青いジャケットをトーマスのトレーナーの上に着せ、俺も同じコニクロの土日限定で買った青いフリースのジャケットを厚手のネルのシャツの上に着た。この趣味のよくない赤いチェックのネルシャツは作業着屋で買ったもつと安物だ。二九〇円。しかし一応コットン百%。独特的のオイル臭さみたいなものは何度洗つても取れないが、なんといつても暖かいし、肌着を下に着ればそう痒くなつたりもしない。出掛ける直前、ヒカルがまた靴を左右逆に履いていたのに気付き、脱がせて履き替えさせる。

まだ自分では漕げない三輪車に乗つたヒカルの後ろを押して、家から歩いて一分とかからない公園に行く。垣根の椿がそろそろ咲き始めてはいたが、日射しは朝から強く、意外に暖かかつた。着いた

ときは誰もいざ、俺たち親子の貸切だった。ヒカルはすぐさま三輪車を降りて、いつものように両手を風車のように振り回しながら園内を走り回った。意味不明の言葉を大声で喚いて、走り疲れると休息する間も惜しんで今度はプラン口。自分ではこれも満足に漕げないでの俺に補助してくれと促す。落ちないように介添えしながら軽く揺らしてやると、きやきやと喜んで顔をくしゃくしゃにする。面白がって揺さぶりを強くすると、すぐにいやいや、こわいこわいと俺の腕にしがみついて泣き出す。かといって揺らすのをやめると文句を垂れる。続いてシーソーに滑り台に砂場。シーソーはいつもすぐには飽きるが、滑り台は階段を昇って滑って、また階段を昇って滑つてを三十回以上繰り返す。つきだしに刺身に煮物に焼き物に天麩羅、という先週の親戚の法事で並んだ膳を思い出す。お定まりといふやつだ。これらを順番に、たっぷりと遊ばせて帰った。特に砂場を。本当は鉄棒もあつたが、あれはまだ無理だ。背伸びしてもヒカルの手は届かない。

子守りを一時間以上して家に帰つて昼飯はカツラーメン。それも出来ていない。これからつくるところ。何も文句はない。なぜなら、俺はラーメンが大好きだから。特に即席ラーメンが。本當だ。そのことに関しては何の不足もない。湯の分量を間違えようが、麵の茹で加減を誤ろうが。ただ、一つだけ致命的なミスを女房は犯した。調味油を入れ忘れたのだ。これを入れると入れないでコクが天と地の開きになるのをラーメンに疎い彼女 有機と無添加が大好物な は知らなかつた。これだけは許せない。だがよく考えれば今から入れても間に合う。さらに女房はヒカルのうどん こぢらはインスタントではない も同時につくらなければいけない。こんなことで一々腹を立てていてはもたない。自分にまたそう言い聞かせることで俺は平静を装う。気持ちを落ち着かせるために新聞を再度つかんでアサツテ君を読みながら普通の調子で言つ。なんか最近のこれ、いや、前からかもしれないけど、特に最近は、食い物のネタ、多くないか。それと、あと、あれ、調味油、忘れてないか。

このラーメン。

「ああ、そう。自分でして」

俺は流し台の隅に置かれた白濁色の小さなビニールの小袋を取りに行く。だから俺がつくつてやると言ったのに。出来ないなら出来ないと素直に最初から言え。自分では小声で呟いたつもりが意外にも大きい声だったのか、女房は急に血相を変えて怒りだした。聞き逃してくれなかつた。

「どういうことよ。こつちはヒーちゃんのご飯でてんてこまいなんだから。お父さんもちよつとは協力してよ。そのぐらい。それに何よ。ラーメンもつくれないって。そんな人どこにいるの。一体」

女は一人きりになるなり、俺のベルトに手をかけ、スボンを半分ずり降ろし、後ろにまわり、尻に噛みついた。それもかなりの強い顎の力で。俺は出血していたかもしない。しかし振り払おうとはしなかつた。驚きと恐怖で体が固まってしまったからではない。頭とは裏腹に立っていたからだ。

女は後ろから俺の腹に手を絡ませて噛み続けた。噛みながら両手は前をまさぐりだした。歯の力は強かつたが、手の動きは極めて緩やかで優しかつた。触つているのかどうかわからないほど。さつきほんのわずかに過ぎつた女房の顔はすぐに消し飛んだ。何だかよくわからなかつたが、深く考えずにされるがままにしようと思つた。女は顎の動きに緩急を設けていた。きつくなんだり緩く噛んだりし、歯形をつける箇所も微妙に移動させていた。もっとこのまま続けてほしいと思い始めたところ、舌を使いだした。噛んで、舐めて、噛んで、舐めて、を繰り返す。俺は無意識に膝を立てて腰を浮かした。舌はカタツムリかなメクジのように尻の方へ這いだし、女は首をひねり顔を仰向けにした。上から見下ろすと股の間からのぞいた女と目が合つた。女は微笑んだ。天女に見えた。その後すぐに口を閉じてまた、股の下に顔は隠れた。隠れたかと思うとまずその点を唾だらけにして滑らかにした後、次にすばめられた舌先で勢

いをつけて穿つた。俺は不覚にも声をあげてしまった。そんな奥まで入るのかと思えるほど深く刺さった、ようを感じた。俺は軽く出した。ベッドのシーツに飛沫が少量飛び散った。女の首は俺の股下でゆっくりと上下運動を繰り返した。また出しそうになつたが今度は何とか堪えた。その代わりシーツをつかんで女の名前を　この時点ではまだ苗字で、それも下にさんをつけて　叫んでいた。死ぬまで続くかと思えた数分間が過ぎた後、自分の口から大量の涎が流れているのに気付いた俺は相当な間抜け面をして大口を開けていたに違いない。

それ以来俺は女から離れられなくなつてしまつた。安い男だ、俺は。少し尻を噛んでもらつたぐらいで、少し尻の穴に舌の先を入れてもらつたぐらいで、少し足の指を隈なく舐め回してもらつたぐらいで、少し金玉を……。あんたこういうことされるの好きでしょう。前からわかつてた。女は急に馴れ馴れしく下卑た口調でニヤニヤしながら、さて次はどんなことをしてやろうかな、といたずらっ子のように上目遣いで俺を見る。

女は大柄で肩幅が広く口も大きくメガネも大きく化粧がヘタで田舎臭く俺の好みでも誰の好みでもなさそうで全く男好きしなさそうでどうしてそうなつたのか皆目見当がつかずそんなゲテモノみたいな雌豚みたいな女だとは思つてもみなかつたので……。

そんな雌豚とヒカルを引き替えにするのはあまりにも馬鹿げているのはわかっていた。のか、本当に。女房と引き替えにするのは一向にかまわない。慰謝料とやらを取られても。しかしひカルは別だ。かけがえのない俺の生き甲斐だ。夢だ。希望だ。辛氣くさく、屈辱的で、保険の利かない、人様に言えない、あの不妊治療の末にやつと出来た宝物だ。朝早くから家で出して持つていつたり、病院でガラス容器に出したり、そのほかにも情けない思いを随分と　女房はもつとしたかもしけないが、それは知らない　した。欲しいと思つてから丸八年かかった。いつときの愚劣な慰みと一緒にには出来ない。のか本当に……。

出来ないから出来ないと言つたんだ、などと言い返さなければ何も問題なかつた。あのとき、俺はどうかしていた。なぜ？ 腹が減つていたから。冗談にしてしまえばそれまでのことだつたのだろうが出来なかつた。どういう意味よ？ としつこく食い下がる女房も大人気ない。もういいよ、とワザとしらけたフリをする俺。舐めてんの？ そこまで馬鹿にしなくていいでしよう。何よ、ラーメンぐらいで、いい大人が。恥ずかしくないの。

ヒカルは横で手を叩いてきやつときやつと笑つてゐる。二人のやりとりをテレビのコントか夫婦漫才か何かと同じに思つてゐるのだろうか。うるさい。俺はいま飯を食つてるんだ、静かにしてくれ。ふー、と大袈裟な溜息をついた後でまた俺の口は開いてしまつた。

「だから俺がつくつてやると言つたのに」

そう言い終わる前に女房が俺のほっぺたをつねつた。「何よ」と言いつつ。ヒカルはますます喜んで一緒になつて俺のほっぺたをつねる真似をする。まずい。俺の父親としての威儀 そんなものは初めからないが がこのままだと危うい。だいたいがいつも侮られ続けているように思う。この辺で一度、目にものを見せてやるかと思つたとき、既に俺の右手は動いていた。いい加減にしろ、と言うのと同時の平手打ちだつた。女房は目を丸くした。縦の長さが三倍に広がつた。猫かこいつは。犬が喋つた。猿が字を書いた。絶対にあり得ないことが起きた。そんな驚きようだ。

「やつたわね」

こちらを鋭く睨みつけてから駆け足で一階に上がる。俺は何気ない風な顔でラーメンの残りを食つた。ようやく麺は程良い歯ごたえになつてゐたが、何の味もしなかつた。女房にまた腹が立つてきた。せつかくの昼食を台無しにしやがつて。俺の大好きな一・五倍を。それまで つい五分かそこら前まで は何もかもうまくいつていたのに。

天氣もよかつたし、ヒカルの機嫌もよかつたし。小春日和という

やつだつた。昨日までは雨が続いて鬱陶しかつた。ここ一週間ぐら
いは十一月とは思えない寒い日ばかりだつたが、今日は違つていた。
ベンチに座つた俺は、つい何度もうとうとしてしまつた。ヒカルは
砂場で長い間砂をいじつてゐる。近所のどの子供も持つてゐるアン
パンマンのお砂場セットで顔の型をつくるのにも、長雨の後は砂が
湿つていていい案配で埃も立ちにくかつた。ヒカルは大人しくお山
か塔をつくつては潰し、潰してはまたつくりしてゐた。俺はその小
さな後ろ姿をベンチに座つて横目で見ながら、うつらうつらし、夢
を見た。女の夢だつた。

して。

女はあれで着やせする方なのか乳房はハンドボールのように大きく、まだそんなに垂れ下がつてはいない。乳輪も白人か妊婦のように大きい。好みの分かれるところだらうが俺は好きだ。

ひつくり返してみる。後ろからがいい。俺はこれが一番好きだ。上から見るときれいな形の白い大きな瓢箪のようだ。瓢箪を眺めながら俺はゆつくりと突く。ぬるぬるとした感触にまた涎が出てくる。今までになかったことだ。涎は俺の顎を伝つて糸を引きながら瓢箪の上にぬるりと滴り落ちる。下の方で絶えず甲高い音が鳴つてゐる。あたる、あたる、奥にあたると歌つてゐるのが、ワタル、ワタル、と自分の名を呼ばれているように聞こえる。知らぬ間に突きは激しくなつていく。突きに合わせるかのようにどろーん、どろーんと途絶えることのないシタールの音がどこからともなく聞こえてくる。低いシタールの音と艶っぽく甲高い歌声とが耳の奥に鳴り響く。どろーん、あたる、どろーん、あたる、どろーん、ささる、どろーん、あたる、どろーん。おくに、どろーん。

目覚めたとき、俺は口を開けていた。顎から落ちた涎はフリースにべつとりとついている。まるで痴呆老人のようだと思つた。前があたりにほのかに暖かい感触があつた。尿失禁によるものではなく、何十年かぶりの軽い夢精によるものだつた。トランクスを通り抜けベージュ色のチノパンもしつかり濡れていた。これはデパートで

買ったブランドものだ。ネルシャツとはゼロが一つ違う。高が知れてはいるが。洗えば染みにならずにきれいに落ちるだろうか。その前に女房は気付いて不審がるだろうか。まあそれほど気にすることもない。公園で遊んでいて汚れた、とでも言えればいい。よその子にソフトクリームをつけられたとかどうとか。臍の下の丸いゴルフボール状の広がりをしみじみと眺めながら、情けなくもあるが、何となくまんざらでもない気もした。まだ俺は若い、と。

ずっと貸し切りだった公園に、若い子連れの母親がやつてきたので俺は慌てて足を組んだ。彼女は目が合いつと俺ににこりと会釈をした。さくらちゃん、お友達よ、仲良く遊びましょうね、と手を引いた子に話しかける。ヒカルは一警しただけで後は無視している。彼は面食いなのだ。俺と同じだ。さくらちゃんは悪いがちょっとブスだ。どこがどうというのではないがなんとなく醜い。第一、顔がかすぎる。ヒカルとはえらい違いだ。この小顔は密かな自慢だ。ヒカルはあっちを向いて一人でお山か塔か、またそんなものをつくっている。しかしさくらちゃんは傷つかない。ミッキーのお砂場セットを袋から出して機嫌よく遊び始めている。彼女は彼女でヒカルなど眼中にない。

さくらちゃんは赤いプラスチックのスコップで穴を掘つている。ひたすら掘つている。奥へ奥へ、下へ下へと深く長いトンネルを憑かれたように。ぽつかりと口を開けた黒い穴が見える。洞窟なのかボーリング調査なのか、犬のように宝物を隠す場所なのか。ヒカルは我関せず、そのまま側で土塊を積み上げている。どうやらヒカルが堆えているのは山でなく塔のようだ。麓を盛らずに上へ上へと湿った砂を重ねていく。やがてヒカルの肩ぐらいまで聳える太くて立派なものが出来上がる。二つを見比べて高校のとき途中まで読んだ精神分析入門だつたか夢なんとかだつたかを思い出した。待てよ。これは逆じゃないのか。お互いのつくるものが。とかなんとか。

さくらちゃんはいつのまにか玩具の如雨露の口を入れて水をちょろちょろと自分のつくりた穴の奥まで如雨露の口を入れて水を汲んで来ていた。

流し込む。空になると再び水道栓のある所へ行き、アヒルのような危うい足取りで重い如雨露を両手で抱えて戻つてくる。何度も繰り返すうちに貫通していないトンネルの水は満杯となり、入り口から泥水が逆流して外へ溢れ出る。しかしそれも一時で、じきに砂に吸い取られて元に戻る。

相変わらず子供らはずつと背中合わせのままだ。母親の意に反して仲良く一緒に遊ばない。さくらちゃんの母親は前屈みになりながらも、決して脚を屈めてしゃがみこんだりしない。彼女は公園に来る母親にしては珍しい、スカートにパンプスという出で立ちだ。フリースにジーンズにスニーカー、髪は少し栗毛に染めて短かい目でほとんどノーメークに近い、というのがここらに来る母親の定番。しかし彼女は黒の胸元の開いたセーターに黒のタイト気味の後ろからだとひかがみが丸見えになるスカートを穿き、よく見ると尻や肩に比べてなぜかウエストと足首だけがおそらく細い。頭は長いまま引っ詰めにもしていいないので風のたびに靡いて顔が半分髪で隠れる。ひょっとして水商売の人なんだろうか。高くて俺なんかにはとても行けそうにないような店で働いているんだろうか。化粧も完璧で、まだ若く、しかも驚くほどの中年だ。さくらちゃんは運悪く父親似か。顔はまずくても稼ぎの方はさぞいいんだろう。さくらちゃんのお父さんは、躊躇かけたさくらちゃんを抱きかかえようと母親はにじり寄る。ほんの一瞬しゃがんだ隙にスカートの中から見えたのは、白ではなく黒の下着だった。俺はまた少し立つてくる。さつきの夢が続いている。

今から十時間ちょっと前、俺たちは連れ込みにいた。もう飽きたか、と俺は訊いた。ぜんぜん、と女は答える。二回終わっていた。女は風呂場で鼻歌を歌つていた。松田聖子だった。どう聞いてもヘタだつた。飽きたの？ とちよつと間を置いてから女は問い合わせる。しかし言い方は自信たっぷりだ。俺も、ぜんぜん、と天井の染みで数えながら答える。

俺たちはつまくいっている。何の問題もない。女は俺よりも一つ歳上だが、何の差し障りもなかつた。三十七も八も、今更同じようなものだつた。女は俺の同僚だ。同じ高校で働いている。俺は学校事務で女は司書だ。つい数ヶ月前まではこんなところでこんなことをすることになるとは夢にも思わなかつた。女のことはずっと前から知つていた。三年前にこの学校に転勤してきたときから。しかし俺は全く何とも思わなかつた。あのとき、一人きりにならなかつたら、こんなことにはならなかつただろう。

俺たちは教育委員会の人権研修で、田舎町の同じビジネスホテルに泊まることになつた。もちろん部屋は別だ。夏のことだった。もともと百五十%俺にそんな気はなかつた。女性職員と泊まりがけの出張や研修はこれまで何度も何度があつた。当然何も起こらなかつた。むしろそれが普通だ。特にこの女は司書になるために生まれ、本とともに生き、本に埋もれ、本とともに死んでゆく、醜い尼さんだ、と勝手に思いこんでいた。容貌、服装、振る舞い、佇まい、どれをとっても俺から見れば性別などほとんど意味をなさない枯れきつた水墨画であり、空氣より軽く存在感のないヘリウムだつた。

だから打ち合わせと称して俺の部屋に入ってきたときも、別段何とも思わなかつた。俺はベッドに腰掛けて新聞を読んでいた。化粧氣はいつもどおりほとんどなく、少々俯き加減で表情がなかつたのもいつもどおり。ただチャコールグレーのスーツのスカートの丈は気持ち短く、腰の線が強調されているように感じなくもなかつた。後で思えば。

学校名の入つた襷付きの茶封筒を携え、ドアを開け、ずり落ちかけたメガネの真ん中を人差し指でくいと上げて入るなり中から鍵をかけたところから女の態度は豹変した。ベッドの俺に走り寄り、新聞を取り上げ、無言でベルトに手をかけてズボンをずり下ろしてから素速く後ろに回り込んだ。突然のことで俺は驚くしかなかつた。いや、違う。嘘だ。止めようとすれば出来た。所詮女の力だ。手品のように手際がよかつたわけでもない。本当は、結構どたばたとし

た動きだった。自分が今何をされているのか、これからどうなるのか考える時間の余裕は十分あつた。振り払うことはいくらでも出来た。その気になりさえすれば。しかし俺はその気にならなかつた。

「あんなこと、誰にでもするのか？」

「まさか。初めてよ」

いくらなんでも初めてのはずはなかつたが、俺が「一人目なのか二十人目なのか、一百人目のかは皆目わからなかつた。歳を考えれば一千人目でも決しておかしくはなかつた。こいつなら淡々と黙々と、案外それ以上の数でもこなしていそうだ。そうだ。この女はろくでもない食わせ者だつた。ドキンちゃんと同じ牛乳瓶底メガネをかけて登場し、五分後には修道女よりは貞淑だが、ソープ嬢よりは遙かにふしだらという、あのポルノビデオの図書館司書そのものだつた。

女は最中、首を絞めてくれたりした。映画とかでは見たことがあつたが実生活では新機軸だつた。本当に死ぬかと思った。頭の芯が痛くなつた。

噛んだりしたのは最初だけだつた。歯形や爪痕やキスマークなど、差し支えのありそうなものは控えてくれた。

出した直後にタオルで両手を縛つて乳首を舐め回してくれたときには、あまりのくすぐつたさに身悶えして思わず大きな声をあげてしまつた。

「素敵だ……」

俺は思わずそう言つた。後からすぐに恥ずかしくなつた。照れ隠しに「よかつた」と言い直した。ものすごくよかつた、とも。これからもまた逢つてくれないか。いや是非とも。俺が嫌じやなかつたら。とかなんとか。明らかに媚びていた。女は返事をせず、ただ笑つていた。右に八重歯があるので初めて気付いた。

女房は階下へ降りて来るなり、俺に顔を近づけた。見てよ。これ。唇のまわりが赤かった。口を自分の指で広げて唇の裏側を見せ

た。嘘だろ。俺は言つたが、嘘なわけないでしょう。女房は怒りながら泣いた。たしかに切れて血が出ている。それも少量とは言えない量の。腐つて破れた鱈子のようでこちらまで氣分が悪くなつた。軽くはたいたつもりだった。この前の渡る世間で、いつものようにわがままを言う聖子に業を煮やした夫の岡本信人がついに正義の平手打ちを食わす。聖子は泣き崩れてしまらしくなる。そういう場面があつた。俺もそれと同じシナリオだつた。しかし現実は違つていだ。向こうは血は出なかつたがこつちは出た。こうなると何十年も殴り合いの喧嘩などしていない俺に分はなかつた。それほどまでに強くぶつたつもりはない、と何の言い訳にもならないことを口走つた。人に手をかけたりしたのは何年ぶりのことだろう。子供のとき以来だ。手加減も思い切りもない。力の配分など何もわからないまま手を動かしただけだ。ついで真つ暗な記憶が蘇るが、それは無意識のうちに真つ暗なままに勝手に消え去る。

また、女房は一階に上がり、ほどなくして降りてきた。忙しい女だ。右手にワイヤレス電話の子機を握りしめている。

「今、お母さんに電話したの。そしたら、ワタルさん出してつ、て。話があるからつ、て。つながつてるから出てよ。ほら」

俺の目の前の卓袱台にぽんとそれを置く。いきおいラーメンの汁が飛んで卓袱台に黄色い液がかかつた。ヒカルはそれまで口への字に曲げて我慢し続けていたが、あまりに険惡な雰囲気に堪えきれなくなつたのか、とうとう泣き出した。俺は無言だつた。興奮していたので、何を喋つていいかわからなかつたし、何を喋るかわかつたものではなかつた。ヒカルはさらに大声で泣き喚いた。全部向こうに筒抜けだ。最悪のお膳立てになつたと思つた。後でこちらからする、俺は小声で女房にそれだけ伝えて受話器を渡す。女房はその子機を握りしめてまた一階に駆け上がつた。しらけかえつた俺はヒカルをあやしながら伸びたラーメンの残りを食つた。ヒカルはじきに泣きやんだが、うどんに箸をつけよつとはしなかつた。黙つて俺の膝から離れて一人で積木遊びを始めた。しばらくしてまた女房

が降りてきた。俺はヒカルに伸びたうどんをまた食わせた。今度は嘘のようにぱくぱくと食べ、汁まで飲みほした。

「全部終わった」

俺は言った。

「全部つて何がよ」

「昼飯だよ」

翌朝、全国の無駄なハコモノ、ワーストスリーの一つとして、週刊誌のカラーグラビアに見開きで紹介されたこともある研修会場に、俺たちは時間よりだいぶ早く着いた。ホテルからバスでも行けるらしいが、タクシーに乗った。ちょっとでも早く行って、いい席を確保したかった。

会場となる建物は、まわりには何もない県道沿いの川縁に建つ。遠目には奇怪で巨大な多角形の黒いオブジェのように見え、近づくに連れて趣味の変わった風俗店かカラオケハウスに見えてくる。運転手は指を指して「おかしいでしょう。子供でも笑いますよ」と苦笑した。世界的に著名な建築家の稀代の失敗作として陰で語り継がれる、誰が見てもその田舎町にはおよそ似つかわしくない会場のメインホールに、まだ人の入りはまばらだった。結局、最後になつても六割程度の入りにしかならなかつたのは俺たちには好都合だつた。後に汚職で捕まり留置場で縊死した前の前の町長が、「政治生命を賭してつくつた」建物のふかふかの赤絨毯は、十五年あまりの歳月を経て、いささかくだびれてきていた。それでも懐かしいバブルの香は、大理石の廊下や、大きな不整形のガラス窓や、やたらと高い天井や、檜でしつらえた会場の椅子や、そこかしこからふんふんと漂つてくる。

俺たちは研修の最初のメニューである講演が始まる三十分以上前に行つて、一番後ろの列の端の席取りをした。女は壁際で俺はその隣。俺の隣には一人の荷物を置いた。冬場であればコートや何かでシート一人分を占領することも不自然ではなかつたが、大した荷物

はなく、荷物置き場はシート一人分で足りてしまった。

正面舞台のカーテンには極彩色の大きな鳳凰が描かれていた。これも名前を訊けばそのへんの子供でも知っている有名な漫画家の手によるものだが、名前を聞かなければそのへんの子供の殴り書きに見える。鳳凰の片目はなぜかしら潰れており、口からはやけに長く太く黄色い炎だか痰だかが吐き出されている。

講演が始まるちょっと前から、女は俺のズボンの上に手を置いてきた。二人とも昨夜はほとんど寝ていない。寝ずにあればつかりしていただが、俺はまあ、平氣だつた。来るなら来い、望むところだ、と。年甲斐もなく奇妙な氣負いと興奮があつた。却つて寝ていなければいいかもしれない。女はもつと平氣だつた。そしてもつとタフだつた。俺は女の手の上にブリーフケースを重ねて傍から見えないようにな隠した。

俺の隣席は五つ空いていた。五つ離れた席の隣人をちらとだけ見やつた。彼は気付いていない様子だつた。本を読んでいた。初老の柔軟そうな男だつた。ロイドメガネをかけていた。俺は一瞥しただけで、後はずつと前を見ていた。下を見たりもしなかつた。俺は用心していた。当たり前だ。誰でもそうする。女は最初はズボンの上からやんわりさするだけだつた。はじめ、指は全体をさすつていたが、次第に先端に集中し始める。ごく軽い、鳥の羽が先っぽを這うような感触。がまん汁がトランクスを経てズボンの外まで染みる。蛇の生殺しは四十分以上続いた。

演台ではいつのまにか、サーモンピンクのスースを着た俺たちぐらゐの歳の女が、何やらくつちやべつている。こういう所で話をする人間にしては、なんとなく蓮つ葉な雰囲気の女だ。眉間に皺を寄せて物憂げな今にも泣き出しそうな目つきは、誰かに似ていると思うが誰だか思い出せない。

腹、立つでしょ。むかつくのよね。安すぎるんですよ。日本は。なんでも。特に人権感覚が低すぎて。セクハラ裁判なんか、向こうなら、息の根の止まるくらい会社からぶんどつてやれるんだけど。

こつちはしょぼいのよね。裁判所も。まだまだ石頭のおじさんばっかりで。おつと、閑話休題。本題に入りますよ。これから。

夫や恋人による暴力は昔からありましたよ。たしかに。でも、問題にされることはあるなかつたの。これが。みんな泣き寝入りしてたのよね。こんなものだと諦めて。それとか、ぶたれる自分が悪いんだと。そんな風に考えて、暴力を正当化したりして。そうしないと、そんな相手を選んでしまつた自分を否定することにもつながつちゃいますからね。だからおいそれとは他人に話せなかつた。でも、決して許されるものではないんです。いいですか。よく聞いてください。暴力というのは、どんな些細なものであつても放置してはいけない。なぜなら、それは際限なく広がる可能性を秘めているから。人間が他の動物と決定的に違う点は何でしょうか？ そう。理性です。理性があるということなんです。人間は理性の生き物なんです。まず、話し合わなければなりません。その次も、その次も、その次も、そして最後も話し合わなければなりません。他に手だてなんかないの。一切。人間である以上は、結局理性で解決するほかないんですよ。暴力というのは、最後の手段ではなく、用いてはならない最低の手段。ええ、言葉の暴力だつて同じ。暴力は暴力。力まかせはいけません。何だつて。

女は俺のファスナーに手をかける。中に五四のナメクジが入つてくる。そいつらは熱くうつすらと汗ばんでいる。汗ばんだ指と掌に俺の汗と液どが混じりあう。女の手が体の割に意外に小さいことに気付く。ブリーフケースの下で軟体動物が自在に忙しく這い回る。小指の爪が袋を軽く引っ搔く。誤つて引っ搔いたんじゃない。わざとだ。俺は嬉しくて思わず声を出しそうになるが、自分の爪を膝にたてて我慢する。それからほどなく女の手の中ではじける。女は掌で上手に包み込み、こぼさないようにファスナーからそつと取り出す。その後押し頂くように顔を近づけ、壁の方を向いて音をほんのかすかにたてて啜る。最後までハンカチは出さず、舌を使って、ついたのを取るため自分の指の端まで隈なく舐め回す。誰も見ていない

い。おそらく俺以外は。隣のロイドメガネはまだ俯いて本を読んでいる。そんなに面白い本なのか。講演は全く聞いていないのか。だとすればけしからん奴だ。俺は一応全部聞いていた。

年齢は関係ないのよね。十代でもするし、ハ十代でもします。学歴や職業も関係ありません。外見でもわからない。こんな人が、と思うような人が、信じられないひどいことをパートナーに向かってするから厄介なんですよ。これが。医者でも、弁護士でも、一流企業に勤める人でも関係ありません。職場や近所で温厚な紳士と呼ばれている彼らが、突然女性に牙を向けるのはセクシュアル・ハラスメントの場合と全く同じです。そしてそれは習慣になります。彼らはすぐ謝ります。都合よく土下座でも何でもします。帰つて来てくれ、僕が悪かった、もう一度とあんなことはしない。やり直そう。このとおりだ。そんな風にうまいことを言つて、出でいったパートナーを連れ戻すためなら何だつてします。そうして連れ戻した後、また同じことを幾度となく繰り返すんです。彼らは征服したいんですね。所有者であり続けたいと。とんでもないことです。困ったことに社会的地位の高い人ほどそういう考えるようです。本当に困ったことですよ。しかし当然女性はモノじゃありません。所有されるいわれは全くない。根底に古くさく誤った考えがあり、それを加害者側が誤っているとはまるで認識していない以上、残念なことですが、抜本的な解決は正直困難です。しかし時間がどれだけかかるても、わたしたちの力で誤った人々の意識を根気よく変えていく必要があります。みなさんもそんな目に遭われたら泣き寝入りせずに、必ず専門の機関に相談してくださいね。積み重ねが大事です。ご静聴、どうもありがとうございました。

「口、拭いてやろうか」

優しく言つたつもりだった。俺は血を見て最初狼狽えたがようやく落ち着いた。女房には今は優しくすべきだと思った。たとえ夫婦喧嘩のたびに自分の母親に電話して逐一いつづけるような女であつ

ても、今回は俺の負けだ。しかし女房は拭わなかつた。俺にも拭わせなかつた。俺は居間でティッシュの箱を持ったまま立ち往生した。おろおろと。ヒカルはその姿を見て笑つた。きやははは。口元の血は変色してじす黒くなつてきている。玄関のチャイムが鳴つた。誰だ。こんな時分に。俺は仕方なくインターホンに出た。

「わたし」

母の声だつた。さつきの電話の義母ではない。俺の母。先にドアを開けたのは女房の方だつた。母は俺の家から五分の距離のところに父と二人で住んでいる。いや、俺たち夫婦は実家に援助してもらう代わりに、両親の家のすぐ近くの建て売りを買つたと言う方が正しい。両親は一人とも未だに元氣で、商店街で電気屋を営んでいる。昔は日曜の朝にはセスナを飛ばして広告したりしていたが、今では量販店に押され、馴染みの年寄り客相手に細々と修理を中心に暇な時間を潰しているに過ぎない。しかしそれももう時間の問題だ。

「聞いたわよ。ミカさんのお母さんから。電話が今さつきあって。「夫婦喧嘩でワタルさんがミカに手をかけて、ミカの唇が切れて出血してヒーちゃんが大泣きして大変だから行つてあげてください」と。どうしたつてゆうのよ。本当に。突然そんなことおっしゃるもんだから、びっくりして慌てて飛び出してきたんじゃないの」

ヒョウ柄のセーターにスパツツ、サンダル履きの母は、玄関で立つたままくし立てた。扉は締めてあるが近所に聞こえないようにな声をつとめて押し殺して。女房が喋る前に俺は言い訳にもならない変なことをもごもごと口走つた。ついかつとなつてとか、軽く撫でただけとか、腹が減つてたからとか、先につねつてきたのは女房の方だとか、ヒカルの教育上よくないので見せしめのつもりでとか、グーではなくパーでやつたとか、傷つけるつもりなんか絶対になかつたとか。母は呆れもせず、もつともらしく、ふん、ふん、と一々大きく頷いた。

「そう、先にミカさんがつねつたのね」

勝ち誇つたように晴れやかな顔で最後に笑つた。

女房は「そうです。わたしが悪かったんです。お騒がせしてすみません。お義母さん」と姑向けの、その場限りの、通り一遍の、思つてもいない、歯が根本から腐りそうな、見え透いた詫びを入れた。終始目は伏せたままだった。母は結局家に上がらなかつた。と言うより、俺たちは上がれとも言わなかつた。玄関でそんな立ち話をし

て、「それじゃ、わたしもお父さんも」飯の途中だから。くれぐれも仲良くな。こんなことで一々呼び出されたまらないわ」

とかなんとか言って、いつものようにヒカルの相手をすることもなくそそくさと帰つていつた。

玄関先で母の後ろ姿が完全に消えるのを見届けてから、女房は大きな溜息を聞こえよがしについた。涙を目に一杯ためて俺をしばらく無言で睨みつけてから、また一階へ上がつた。今度は後をついて俺も上がつた。間抜けな男だと自分で思いながら。女房は寝室のベッドに俯せに倒れ込み、声をあげて泣き出した。俺が近づくとあつちへ行つて、と外に聞こえるくらいの大聲を出した。それでも近寄つてわざとらしく髪の毛を撫でたりしたが「触らないで」と放つた肘打ちは鳩尾に見事にはまり、俺は咽せかえつて涙が出てきた。

実は昼からの講演のときも俺たちは大人しくしていなかつた。

いや、少なくとも俺の方はするつもりだつたが、出来なかつた。

今度は壇上では陰気くさい痩せた年齢不詳の女が、ぼそぼそと下を見ながら小声で喋つていた。

最近、子供の発達の「遅れ」だけでなく、「歪み」や「偏り」にも目を向けていこうという動きがあります。アスペルガー症候群やADHDと呼ばれる注意欠陥性多動性障害などの広い意味での「発達障害」のある人は全人口の三から五パーセントに及ぶといわれています。クラスに一人はいる計算です。たいていの場合IQは正常値で、普通学級に在籍しています。病的な意味での他覚症状や自覚症状もありません。しかしたとえばADHDを例にとると、まず多

動癡があります。授業中平氣で立つて歩いたりします。高学年になつても治まりません。ひどい子になると、ちょっと田を離した隙に運動場に出て走り回つたりします。授業中にです。そして衝動的傾向。彼らは先を読めず瞬間、瞬間を生きています。ガラスに突然手を突っ込んだり、三階の窓から飛び降りたり、灯油を飲んだり。そんなことをすればどうなるか、ほんの少し考えればわかることなのに彼らにはその「ほんの少し」が考えられません。気がついたら骨折していたり、入院していたり。往々にこの子らは注意力が極端に散漫だつたりもします。じつとできない。人の話が聞けない。しきりに手を動かす。貧乏搔すりが止められない。結局親からみれば育てにくい子、学校では扱いにくい子ということになり、虐待やいじめの格好の対象になります。また非行や犯罪に走るケースも少なくありません。先天的なもので、前頭葉に損傷があるともいわれていますが、明らかではありません。MRIでもわかりません。脳波も正常な場合がほとんどです。しかし日常生活をスマーズに行えないという点では、間違いなく障害があると言えます。ですから早めに察知し、何らかのサポートをしていく必要性が出てくるわけです。全体の割合では男児が女児より圧倒的に多くて以前は……。

俺がまじめに聞いている最中、脇腹をつついて女が耳元で囁いた。

「あたしにもして」

今度は俺に手を動かさなければならぬ順番が廻ってきた。顔だけ前を向きながら右手で女のスカートのジッパーに手をかけた。今度は女が自分のハンドバッグを腿の上に乗せた。たまたま俺がジッパーのある左側に座つていたのがよかつたと最初は思つた。もしかして女はこれも計算の上で俺の右に座つたのだろうか。しかしどつちでもいいことだった。なぜならこれはよくなかつた。明らかに失敗だつた。俺がさつき女が俺にしたことと同じようなことをし始めた、女はすぐに声を立てた。最初は小さな声だつた。それでも俺は大いに慌てた。おい、待て、やめる、やばいよ。冗談じゃないよ。小声で言つて手を止めると、なんでやめるの、もつと続けてよ、と

いう恨みがましい目で俺を見つめる。通常では考えられないことだが、俺は仕方なく気圧されて言われるままに続けてしまった。すると今度はすぐに、あつ、という呻き声を唐突にあげる。周囲が一斉に振り返る。ロイドメガネもこのときばかりは読みかけの本を伏せてこちらを向く。俺は顔から火が出そうになる。慌てて動作を止めた後、どうしていいかわからない。しかし、口が勝手に動いてくれた。

「なんでもありません、ちょっと気分が悪くなつたようなんです。

大丈夫ですか？」

と咄嗟に出鱈目を言つて一人で会場を出た。もちろんジッパーは人に気付かないようにどんぐさに手早く締めて。前では陰気な女が、抑揚のない声で淡々と下を向いて話しているのが扉を開けて振り返つた際に見えた。彼女が何を話していた今まで聞き取れるような余裕はとてもなかつた。

俺たちは無人のロビーに出ると、お互いが顔を見合させて笑つた。あははは。わけもなく馬鹿笑いをした。気付かれたかな。大丈夫よ。女はぺろりと舌を出した。随分長い舌だつた。そんな仕草をする女だとは、職場にいるときは想像もつかなかつた。

「ともかく、外へ出ましょう。ここは空氣、悪いから」

女の変な意見に俺は頷いた。外へ出たが何もなかつた。店も家もビルも小屋も納屋さえも。建物らしきものは、県道を挟んで少し離れたところに町役場と消防署が見えるぐらいだつた。行き交う車の数も点滅信号さえ要らないほど少なく、ほとんどが砂利や建設廃材を積んだダンプカーだつた。道端は車が去つた後もしばらくは砂埃がきつく、そんな所で突つ立つていてもしづがない俺たちは自然と河原に下りた。

芦がまばらに生える初夏の川縁は意外に涼しかつた。まだ梅雨が明けずはつきりしない鼠色の空の下、湿つてところどころぬかるんだ砂利道を、いつのまにか俺たちは手を繋いで歩いていた。誰もいないので知らぬ間に大胆になつていた。俺たちは無言で歩いていた。

何も言わなくても行く先は決まっていた。向こうにある茂みには芦が多く生い茂っていた。完全に姿が隠れるには至らないかもしれないが、それはそれで一興だ。ダンプの運転手が脇見をして事故でも起こしてくれたら、何て素晴らしいんだろう。数分後を想像して、俺の胸は高鳴った。傍から見れば氣のふれた薄気味悪い中年かもしれないが、俺たちは結構楽しんでいた。

昨日のチェックインから丸一日も経つていなかつた。

俺は仕方なしに一階のパソコンのある物置部屋で仕事をすることにした。女房の桐のタンス、ヒカルのベビータンス、木製のスヌーピーのカタカタ、布製のミフィーのマット、スーツを買ったときはるやまでもらつた萎んだ三つの赤い風船。乳児用の体重計、ズボンプレッサー、ミシン、ビニール袋を被つた扇風機、マグナムドライ三五〇缶一ケース、家電製品の空箱、玩具の空箱……。そんな物に埋もれて隅の方に机と椅子と古い富士通のFMVがある。よく固まるので買い換えるといつも思いつめてから一年は経つ。体育館の建て替え工事の数字の検算をする。職場で何度も数が合わないので持つて帰つた。エクセルの単純な演算だ。普通にやれば豚でも合うはずのものがなぜか合わない。

女房は俺を寝室に入れようとしている。しばらく一人にしてくれと言つてドアを閉めたままだ。鍵はかかるないので入つていけるが、そこまではしない。その前に、階下にいるヒカルをいつまでも一人で放つておくわけにいかないので気付く。もうとっくにテレビの上に登つたり、台所の奥にしまつた包丁を取り出して振り回したり、天麩羅油の入つた缶を床にひっくり返しているかもしれない。そう思つて急いで階下に降りると、居間のヒーターの前で気持ちよさそうに口を開けて寝ていた。押入から毛布を出してかけてやり、また物置に戻り一人で仕事を片づける。女房が気になつて手につかない、ということはない。歩る。なぜか却つて頭が冴えて数字が合いだした。普段なら三人で買い物やらなんやらで、どこかへ出掛けな

くてはいけない時間だが、今日は仕事が出来る。休みの日に家で仕事を出来るなどと喜ぶのは馬鹿な話かもしれないが、女房はその点、とても不寛容だ。仕事は外でして。家に持ち込まないで。わたしを愛していないの。と新婚当初に手の遅い俺がお持ち帰り残業をするのを咎めた。以来、学校で残つてしこしこと片づけることはあっても、家では一切やらない。ところが「放課後」は今や毎日のように連れ込みに行かなければならなくなつたので、仕事には充てられない。仕方なく無駄を承知で何の気なしに持つて帰つた書類が役に立つた。刹那の自己満足を味わつていると女房が部屋に入ってきた。ノックはない。

「また、おかあさんから電話があつたの」

「どつちの？」

「わたしの」

「何て？」

「そちらのお母さんから電話をもらつたって。やつを家に行つていいだいたといふ報告の電話。すると何ておっしゃつたと思つ。お義母さん。見てきたけど特にびうとううことない。他愛ない痴話喧嘩だから心配ない。ですつて。ワタルもそんなに強くぶつたんじゃないし、ユリさんがぶたれるときによく閉じてそれで勝手にご自分で口の中を切つたんじやないか。だつて」

味方をしてくれた母には悪いが、感謝は出来ない。そんな嘘をついて何になる。ますます俺の立場が悪くなるだけだ。

「ひどい」

女房は泣いた。その後きつ、と俺を見据えた。もう血はなかつた。拭われていた。

「ちゃんとお義母さんに言つといて。わたしが自分で切つたんじやないつて」

女房は激しくドアを閉めて出でていった。

「これは仮の話だが」

と俺は断つた。

もし、本気で好きだと絶対放さないとか言つたら、どうする？
え？

俺は後ろから両方の乳房を握りしめて耳元に囁いた。

好きだ。どうしようもない。どうしたらいいんだ。おかしくなりそうだ。片時も頭から離れないんだ。何もいらない。俺と心中してくれないか。

え？

本当なんだ。お前にちゃんとぎられて殺されたいんだ。お前も首を絞めて楽にさせてやるからさ。

俺は目を見開いた。

つまり、なんだ、あれだ。女房も棄てる。子供も棄てる。頼むから俺と一緒に死んでくれないか。

一気に喋ると後は女の出方を待つた。女はほんの数秒だけ考えた後、全く動じることなく、俺の目をしっかりと見据え、顎を上向きにして軽くほくそ笑んだ。そして俺の背中を平手でぱちんと叩き、冗談はよし子さん、と百年前の馴熟落を言つた。

こいつなら大丈夫。俺は確信した。

間違つても女房と別れて一緒になつてくれとは言い出さないだろう女。俺は幸福だった。誰も俺たちのことには気付くまい。第一、地味すぎる。一人とも目立たないことこの上ない。そしてあまりにもざら。学校事務と司書の不倫の件数というのは、世間で一体どのくらいあるのだろうか。掃いて捨てるもまだ湧いてくるのではない。教師と生徒でも今時さほど珍しくもないが、俺たちなんかはおさら他人に知られたところで、「それが？」でおしまいの話ただし女房は別だ。

ざまあみろ。意味もなくそんな独り言を呟いて、俺はベッドの枕元から流れる有線の軽いジャズを聞きながら一人ほくそ笑んでいる。
「生徒とかともするのか？　たまには」
「まさか」

「それだけ好きだと大変だな」

女は何も言わずに笑っている。今までばどいだったんだよ。適当よ。お前の適当はさぞ凄そうだな。

俺たちの会話は夫婦のそれよりもっと夫婦みたいかもしれない。いや、違うだろ？ よくわからない。俺は女房とこんな話をし合つたことは一度もない。すべきかどうかもわからない。

もう一回いい？ 風呂場から女の鼻に詰まつた声がする。折れるまでやるさ。そう言いながら俺の足はそそくさとバスタブに向かっている。

「お持ち帰り」の仕事を片づけて、ようやく正気に戻つた俺は義母に電話して平謝りに謝つた。それこそ受話器に最敬礼した。差別的な言質による舌禍事件を起こして不登校になつた生徒の保護者に電話で詫びる教員の姿を思い出した。しかし俺の詫び方の方が腰がもつと曲がっている。彼の場合、頬を伝う汗の量と吃音の回数は夥しかつたが、腰はさほど折れていなかつた。

まったく、男として、人として、夫として、親として、論外であり、あつてはならないことであり……。

俺は延々と意味のないことを速射砲のようにまくし立てて言い繕つた。許してはくれないだろ？ どんなひどい罵声を浴びせられるか。そう思つていた。しかし、意外だった。義母は最後に一言だけ言つた。

「どうか、仲良くしてやつてくださいね」

怒つてもいなかつた。「ごく普通の言いぶりだつた。実はこうなるような気もしていた。保母さんに悪戯を許してもらつた園児のよう」に、俺はほつとして受話器を下ろした。

俺の親は一人ともこの結婚には不賛成だつた。反対といつほどでもないが、賛成もしなかつた。

「ピアノの先生なんでお高いだけの世間知らずでどうしようもない妻の父親が音大の教授というのも気に入らなかつた。

「やめといた方がいい。難しくて気位ばかりで金はない。いざといつとき頼れん。ある意味で最低かもしれんぞ」

最低は言い過ぎだ。それならうちはどうなる、とか思いながらも、

「お前は見栄坊だからあんな子がいいのはわかる。しかし俺には理解できん。もつとなんというか。生涯の伴侶なんだから。面や学歴や肩書きや若さや、そんな上っ面だけ舐め回さず、中味というか人柄というか……」

そんな親父の言葉を今頃になつてなるほどと噛みしめたりしている俺は、やはりどうしようもないアホウドリだ。上っ面だけでなく中味をもつと吟味して、選ぶべきだったよ。例えばあの女みたいに……。しかし親父が中味の詰まった立派な人物であるかどうかはまた別の話だ。女房があの夜ヒカルを連れて里に帰った後、俺に電話をかけてきた。

「手をかけたお前が絶対悪い。裁判にでもなつたら圧倒的に不利じゃないか。ヒカルも相手も証人だ。嘘を言つてもばれる。家屋敷やら財産やら慰謝料やらごつそりやられる。それより何よりヒカルを取られてしまう。どうするつもりだ。馬鹿なことを……」

俺の貯金に親父の貯金を付け足して買った家を取られるわけがないし、第一これが「屋敷」か、と俺は笑いかけたが、親父は俺たちが今すぐにでも離婚するのを前提に喋つていることに気付いて笑えなくなつた。このとき親父はいつものように女房の名を呼ばず、単に「相手」と呼び続けた。義父や義母やその弁護人も含まれるという意味だろうが、親父なりの女房への憤りと憎しみが歪んだ物言いに表れていた。

「手に職があるのも却つて徒だ。あっちで子供相手に教えれば何も不自由しない」

「あの子、自分で切つたんだよ。きっと。なぜつて？　お前がひつぱたいたときは何ともなかつたんだろう。その後二階に駆け上がりて、降りてきたら口のまわりが赤かつたって言つじやないか。いか

にもあの子のやりそなことだよ。ひょとしたら血じやなくてなんか塗つてたのもしれないよ。お前には触らせなかつたんだろ？自分でいつのまにか拭き取つてたことだつてさ。何から何まで怪しいよ。お前は騙されてるんだよ。だいたい、あの子はお前にすぐに口答えするだろ？わたしは自慢にはならぬけど、この歳になるまで、お父さんに口答えしたことなんか、いつへんもないよ。舐められてるんだよ。お前は。たしかにあの子はどこかお前を馬鹿にしてるよ。心の底に「来てやつた」ところがあるよ。きつと。お腹の中じや何考へてんだか。だから、あんなわがままそなお嬢はイヤだつて言つたのに……。お前、ちゃんと自分の名義で貯金しどかないと、本当にやられちゃうよ。ボーナスとかも自分で管理してるのがい……」

途中で電話を代わつた母が泣きそな声を絞り出した。

俺たちはスキー場で知り合つた。よくある話だ。俺はスキーだけは人並み以上につまかつた。体育はいつも4だつたが、スキーだけなら間違いなく5が貰えただろ？女房はボーゲンしか出来なかつた。俺にはそれが可愛く見えた。ゲレンデでは何でも俺の言う通りにした。それが直ちに、従順で何でも言つことを聞きそな風に見えた、とまでは言わない。そんなことはわからない。たつたの二日か三日、雪の上で昼間は滑つて遊んで、夜はロッジで甘いカクテルを呑みながらきれいごとを並べ合つただけで、お互いのことなど千分の一もわかるはずない。

女房は最後の夜、初めて自分はピアノを教えているとか話したが、俺は適当に相づちを打つたもののその実、何の関心もなかつた。自分は絶対音感があるとか、全国的なコンクールで入賞したことがあるとかいった自慢話をただ黙つて笑いながら聞いていた。それほど腕前ならどうして近所の子供に教えたりせずにプロにならぬか、などといったセリフは思つていても口にはしなかつた。

俺の音楽の成績はずつと2だつた。音痴、というやつかもしれない。多分そうだろう。だからカラオケも大嫌いだし、誘われても絶

対歌はない。しかし俺は我慢して話を聞き続けた。ほんのわずかのモスコミュールで真っ赤に染まつた女房の夢中で話す口元が、無性に愛らしく思えたからだ。艶のある濡れた小さな赤い唇から唾が飛び散つても、ひとつも不快ではなかつた。

格好良く見えた。でも、それだけだった。それだけの人だつた。でも、あのときはそれが一番大事だつた。それだけでもいいと思つた。でも、やっぱりちがつていた。人間は中味だ。見抜けなかつた。騙された。いや、ちがう。最初からわかつていて。本当はわかつていた。軽い人だというのも、冷たい人だというのも、口先だけの人だというのも。全部わかつていて。なのになぜか選んでしまつた。どちらにしてもわたしが馬鹿だつた。

女房ともつと前に喧嘩したとき、そんなことを口走つたことがあつたのを思い出した。

「ほつぺたをちよつと撫でられたぐらいで母親に電話して実家に帰つちゃうような女、棄てちやいなよ」

事情を話せば女はこんな風に言つだらうか。女は女房のことを「女」と呼ぶだらうか、それとも「奥さん」と呼ぶだらうか。女房の話題はお互いがこれまで一言も口にしたことがないので、何と呼ぶのかさえ想像もつかない。

駅から歩けば二十分以上はかかる古びたマンションの駐車場に、俺たちは別々の車から降りた。車の形の四角い虎ロープを地面に打ち付けただけで、水たまりもあれば雑草も生い茂る原っぱ。大した管理もされていなければ空きも一杯あるので、どこにでも停められる。

学校が終わると、時間を少しずらして俺たちは帰つた。先に出た女はコンビニの駐車場で時間調整のために待つっていたが、俺が来たのをバックミラーで認めるとワインカーを右に出した。いつもはここで左に出す。今日はいつもとは違い、連れ込みには行かない。これからは方向が逆だ。

日はとっくに暮れていた。再開発が一向に進まない街のまわりには古い工場の煙突ぐらいしか高い建物はなかつた。その黒く細長い物陰だけが満月に映えている。白のワゴンRに施錠している女に俺は後ろから小声で尋ねた。声というか音は大丈夫なのか、と。心配ない。建物は古いがあれでも防音装置が施してある。ちょっとやそつとでは漏れないはず。実は前にハイツにいたときは壁が薄くて、隣の部屋の男がコツコツを逆立てて聞いていてつきまとわれたりして困つたことがあつたと女は言つた。いつの話だと訊くと、はぐらかした。さあ、十年ぐらいは前のことのような気がする、と。自慢めいたいかがわしい話だと思った。作り話かもしけないそんな話に、しかし俺は興奮した。相手の男や隣の男、それに十年ほど前の若かつた女がめまぐるしく頭の中で動き回つた。

相手の男は肉体労働者か水商売。おそらく板前。それがいい。頭は五分刈りで汗かきで体臭は割とある方だが毛深くはない。煙草はよく吸う。上背はあまりないが、がつしりしている。眉が太く指がごつい。どこで知り合つたかもわからないが、居酒屋ぐらいにしておく。カウンターで声をかけたのは女の方。チューハイでほんのり顔を赤らめた女が思わずぶりな態度に出たので、これはいけると思つた男は特にタイプではないが、ただならまあいかと誘いに乗る。男の方もふけ顔だがまだ二十代。一人とも大して酔っぱらわないまま、すぐに話はまとまる。その晩、比較的早い時間から連れ込みに行く。男が付近に路上駐車したガンメタのクラウンで。結構よかつたので男の方が入れ込む。それからは女の部屋に男は飽きもせず通い詰めることになる。同棲はしない。いや、ひょっとしたら一時期していたかもしれないが、それはどちらでもかまわない。隣室の男はやはりメガネをかけている。かなり度の強い近視で腺病質な二十二歳。専門学校を中退して現在はフリーター。それも短期のアルバイトばかり。体が弱いので常勤は無理だ、と周囲にはこぼしているが、もちろんどこも悪くない。以前鬱病で医者に通つたことがあるのを密かに自慢している。自分は実は芸術家気質なのだと。警察の

世話になつたことはないが、職質と称さずよく警官が部屋を尋ねて来るのには気を悪くしている。彼らはおしなべて低姿勢だが、そのへんが却つて気持ち悪い。いつかでかいことをやって、あいつらも含めて世間を「きやふん」と言わせてやろうと思つているが、差し当たつてめぼしい目標はなく、最近はもつぱら夜が来るのを楽しみにしている。普通にしていてもあの声なら木造一階建て安普請のこのなんとかハイツでは隣に丸聞こえだが、コップを使うともつとよく聞こえるというので、試してみたらそのとおりだつたことに気がよくしている。テープに録音して後から楽しんでいるが、やはり生が好きだ。女は無意識か、あるいは隣を意識してか、ときどき素つ頓狂な声やわざとらしい大袈裟な言葉を吐くのでしらけることもあるが、概ね彼は満足している。女のことは調べつくしてある。年齢、職業、血液型、スリーサイズ、好きな食べ物、家族構成、性的嗜好、その他諸々。電柱の「ミニ袋」をあされば一発だ。色んなことが手にとるようになる。女は不用心でずぼらな性格なのか、下着を切り刻まずに棄てる癖がある。この前体液の付着した下着が丸々出てきたときは、あまりの嬉しさに声を出しそうになった。部屋の鍵が新聞受けの裏側にまるでいつでも忍び込んでください、と言わんばかりに置いてあるのも最近見つけた。それ以降、女の出払っているときを見越して、しおつちゅう部屋に忍び込むようになる。鍵を開けるとまず、部屋の匂いを思い切り嗅ぐために倒れそうになるまできつて息を吸い込む。やりすぎて本当に氣を失いかけたこともある。餓えた動物的な雌の匂いが嗅げると嬉しい。たとえば汗や尿。だからトイレの汚物入れの点検は欠かさない。それからクローゼットの衣類を嗅いだり舐め回したり穿いたりしてまたきれいに畳んで元に戻しては帰つたりしていたが、じきに物足りなくなり、妄想は膨らみ、自分で抑えきれなくなり、女がよく出入りするスーパー やコンビニの前をうろうろするようになる。はじめのうちは五分刈りや警察を恐れてこそこそ地味にやつっていたのだが、徐々に大胆に後をつけ回したりするようになり……。

部屋に入るなり玄関の鍵もかけずに俺はズボンをずりさげた。いつものことなので女は慌てなかつた。それが連れ込みか自分の家の違いだけだつた。女はいつのまにか俺の頭の中で男好きのする天下の色女になつていた。

俺の妄想も勝手なものだ。

女の実家はうどん屋で、このすぐ近くだといつ。三つ違いの兄が最近やつと結婚して家業を継いで親と同居することになつたので、自分はまた家を出でいかなければならなくなつた。過去一人で暮らしたのはなんとかハイツの一年半ほどだけだつた。家業のことも、兄弟がいることも、兄嫁は女より十歳下であることも、俺はこのとき初めて知つた。今時あんなださいうどん屋をよく継ぐ気になつた。来る嫁も来る嫁だ。若いみそらで頭がいかれてているのではないか。我が家であるということからか、女の口は滑らかになつていた。俺たちは身の上話や過去の話は滅多にしない。必要があるとき、その都度お互いが小出しにする。都合の悪いことは話さないし訊かない。辻褄が少々合わないと思つても一々詮索しない。こんな仲になつてから二月以上経つてゐるが、女の部屋に来たのは今日が初めだ。

女房が昨日、里へ帰つたことは女には話していない。話していなが、偶然一人暮らしを始めた女の方から誘つて來た。天恵、とうと大袈裟だが、まあそんなものかとも思つ。

昨日のあの件以来、俺の心と体はもうほとんど女に傾いてきている。冷静に考えても、あんなことぐらいで里に帰るような奴ではこれから先が思いやられるし、今回もすんなりと帰つてくる保証はない。また帰つてくる代わりに、妙な条件のようなものを突きつけられたりするのはたまたものではない。しかしあの女房ならそれもありかな、とも思える。ヒカルは残念ながら一人っ子になるだろう。今の女房では弟や妹は産めそうにない。俺が植え付けられない。すまないヒカル。パパはもうこっちのおばちゃんの方がいいんだ。ママには飽いただんよ。でも、ヒカル、お前だけは放さないからね。俺は随分と虫のいいことを言う甘ちゃんどうか。あるいは支離

滅裂だらうか。女とヒカル、その一つさえあれば、それ 자체が矛盾するが、後は何もいらない。一生女房に法外な慰謝料を払い続けることになつてもかまわない。木造三階建てで二十坪もないあんなウサギ小屋など、いつ叩き売つても、ただし三階の粗大ゴミとなつているグランドピアノは女房に引き取つてほしい。でないと地震が来れば底が抜けてしまう。いい。そして女房と別れてヒカルを女と一人で育てる。夢のようだ。だがその前に女房は死んでもヒカルを離さないだろう。

小六のときの担任はイボンヌ・エリマンを意識していた。

当時大学を出て三年目か四年目。ストレートの長髪に、細めのジーンズを穿き、夏場は体より小さめの絞り染めのTシャツを着ていた。そんな格好をするものだから、瘦せている割にグラマーな胸元はいつも揺れてはちきれそうで、子供とはいえ六年にもなると目のやり場に困った。切れ長の目と口元が「ジーザス・クリリスト・スープースター」でキリストの恋人役を演じた件の日系米人女優に似ているというのは、本人が言い出したことで誰もそんな「外人」のことなど知らなかつた。授業中もその映画を見るようにとさかんに勧めてはいたが俺は未だもつて見ていない。実家はアルミサッシの代理店を父親が経営して羽振りはよく、大久保清と同じマツダのコスマスボーツで通勤していた。父兄らは「若いのにしつかりしていれる先生」と言い、子供らは「おもしろい先生」と言つた。

ホームルームの時間は、自分は一言も口を利かず、運営の一切を子供らに委ねた。同和教育や性教育などの教科書を使わない授業もマメに行つた。学級文庫には自分の家から持つてきた「カムイ伝」や「アポロの詩」などが並んでいた。自信家といえば自信家。気障といえば気障。我が家儘といえば我が家儘。しかし甲斐性持ちといえば甲斐性持ち。

俺の特有の癖も見過ごさなかつた。それまでの単なる「落ち着きのない騒がしい子供」以上の扱いを俺は受けた。一学期の途中から

卒業するまでずっと、俺だけは月ごとに行われる席替えの対象外となり、常時教室の一番前の真ん中の席に座られ、彼女の監視下で授業を聞いた。それでも一時間以上じつとしていられないところや、黙つて人の話を聞かずにすぐに茶々を入れてしまうところなどは結局改まらなかつた。

俺が特別扱いだつたのは何もそればかりではない。彼女は俺だけいつもなぜかしら呼び捨てにした。他の生徒のように苗字の後に君を付けて呼んでくれなかつた。

「ワタルは将来詐欺師になる」

とよく皆の前でからかつた。調子がよくて嘘がうまいから、と。あながち冗談ともそれなかつたし、親しみを込めて言つてくれているとも思えなかつた。

夏休みに入る直前の林間学校へ行くバスの席は隣だつた。修学旅行のときもそうだつた。彼女は俺のお目付役のようなものだと俺自身は思つていたし、クラスの連中も多分そう思つていた。だからいつも一緒にいるのは不自然ではなかつた。顛願だとか、先生を独り占めしているなどと言つて妬む奴もいなかつた、と思う。バスは国道沿いの連れ込み街に通りかかつた。昼間なのでネオンはないがけけばしい装飾は今も昔も変わらない。

「あれ、何か知つてる？」

モーターホテルとカタカナで書かれた看板をそのまま読み上げ、車で泊まるところだろう、と俺は答えた。

「どんな人が？」

「どんな人つて、そりゃあ、長距離トラックの運転手の人とか、車で旅行してる人とか、じゃないの？」

思つたとおりのことを素直に俺は口にした。彼女は笑い出した。

「あれはね、男の人と女の人と車に乗つて来てね、……するところなのよ」

また、彼女は体罰も行つた。まだその当時は、若干そういう教師もいるにはいた。これはどういうわけか対象が男子に限られた。

忘れ物やつまらない悪戯をしたとき、黒板の前に後ろ向きに立たされてプラスチック製の五十分センチの定規でズボンの上から尻を三発叩かれた。三発というのは不文律でそう決まっていた。体育会系の彼女は中途半端に撫でるようなヤワなことはせず、ちゃんと力を込めて、後で少々腫れるぐらいの強さで叩いた。皆はこれを結構恐れながら、中には顔を紅潮させて密かに喜ぶ奴も既にいた。俺だ。

イギリスの小学校で体罰を廃止することになった一番の理由は、若い美人教師に鞭で叩かれて欲情する男子児童が続出したからだというのを新聞のコラムで読んだことがある。それは大人になつてからのことだ、俺はあるときそんなに異常でもなかつたのだと改めて自分に言い聞かせたりした。

俺のクラスで「続出」するほど俺と似たようなのがいたかどうかは知らない。まさか「どうだった?」とほかの奴らに訊けるはずもない。また彼女が「若い美人教師」かどうかは異論のあるところだろう。それでも俺は黒板の前に呼ばれるたびに夢心地だった。そしてそれを気付かれないよう、辛そうな演技をするのは大した苦労ではなかつた。わざとつまらない冗談を言つて授業を中断させたり、幼稚な悪さを　授業中突然立ち上がりて尻を振つて踊りだしたりした。

その日の悪さがどんなくだらないものだつたかは思い出せない。何せ四半世紀前のことだ。だがそれから後は昨日のことのように覚えている。

俺はいつものように黒板の前に向かつた。渋々、嫌々を装つてふとくされた風にのそのそと。ポケットに両手を突つ込んで、正露丸を一瓶まるごと噛み潰したような顔をして。もしあのとき、劇団の子役のオーディションでも受けていれば多分受かつただろう。

氣をつけを強要した後、彼女は手加減せず、まず一発放つた。俺はいつものように唇を噛んだ。続いて二発目。また下唇を、今度は少し大袈裟に噛んでみた。そして三発目。喜びを殺して目をきつと開いてみせた。歌舞伎の見栄のようでわざとらしかつたかなと反省

した。これで終わりだ。そう思った瞬間、さらに一発、オマケが来た。気を許した俺は　ほんの一瞬　喜悦の表情をしてしまった。してしまったが、またすぐに元の暗く悲しみに満ちた体罰児童の顔を拵えた。おそらく誰も気付かなかつた。彼女のほかは。それを見逃さなかつた彼女はかすかに笑つた。その笑いが微笑みか蔑みか判然としない。わずかコンマ一秒。二人の間で合意は成立した。俺は「ずるい。約束違反だ。四発は」とまた演技しながら引き上げた。

掃除当番で遅くなつた俺と教室で一人きりになつたとき、やはりこの人も中から鍵を閉めた。偶然を裝い、その実、用意周到だったのも誰かと同じだ。

突然、いつもと違つた猫撫で声で窓際にいた俺に近寄つてきたとき、そこが三階だつことを俺は思いだした。しかし、あのときの女のように走り寄ることはなく、ゆっくりと摺り足で近づいてきた。隅で突つ立っている俺に息がかかるくらいまで側に寄つてから、自慢の八重歯を見せて微笑んだ。それからまた自慢の白魚のような細長い指を伸ばして俺の喉をさすつた。うつすらと汗ばんだ人差し指の腹で膨らみかけた喉仏を何度も何度もなぞつた。長い爪には薄く塗られたマニキュアが光つていた。静かな教室に一人の唾を飲み込む音が交互に響いた。それまで嗅いだことのない、むせ返るような酸っぱい香水の匂いがした。彼女にとつてもその日は特別の日だつたのかもしれない。それと汗と、消しゴムのカスと、給食のミンチカツに入つていたタマネギの匂いが混じりあつて、目と鼻がつんと痛くなつた。二学期が始まつたばかりで、九月とはいえ真夏と大差なかつた。西日がまともに俺たちに当たり、濃い影をつくりだしていった。影踏み。彼女は俺の影を踏んで動けなくした。本当に金縛りにあつたように身動きがとれなくなつていた。

俺の背は学生時代にバスケットの選手だつた彼女の肩ぐらいまでしかなかつた。脂汗が粒になつて溢れ出る。似合わない卑屈な愛想笑いでもしてその場を取り繕おうと試みても、強ばつて出来ない。いざ、こういう場面に立たされると怖かつた。好奇心よりも得体の

知らない恐怖心が勝つた。先生、俺に詐欺師は無理だよ。俺は根性なしだよ。彼女は笑いながら振り上げた右手を勢いよく俺の頬に振り下ろす。顔に重く熱い焼き鎌を喰らった俺は弾け飛んで掃除箱の前まで転がった。床はきれいに掃かれていて思いの外よく滑った。彼女はそんな俺を微笑みながら優しく手を添えて立ち上がらせてくれた。そしてもう一度同じことをした。今度は左手を俺の右の頬に振り下ろした。手の残像が残るか残らないかの早業だったのはさつきと同じようだ。俺はかわすことも手で防ぐことも出来ないまま、さつきと同じように床の上を横になつて滑った。唇は切れていなかつたが、鼻血は少し出していた。このときの彼女の「体罰」は教育的見地に基づく　ただし表面上は　いつもの児童向けのそれではなく、完全に彼女の嗜好に基づいた大人向けのそれだつた。容赦はしなかつた。彼女はようやくそこで部屋のカーテンを閉めた。忘れていたのではない。俺が声もあげられないほど恐れて抵抗できなくなるのを確かめてからそうしたまでだ。横になつた俺を再び抱き起こして、今度は俺の半ズボンのボタンに手をかけた。その前にハンカチをポケットから取り出して口元に持つてってくれた。血を拭ってくれるのかと思ったが、そうではなかつた。俺の口に絞つたハンカチを宛い首の後ろで結んだ。つまりは猿ぐつわだ。

それから後は覚えているが、思い出したくはない。

「ワタル、あんたつて、もともと相当落ち着きない方じゃん。ハンパじゃくさ。それって、多動児、ていうんだよ。

それに、この前の知能テストの結果、あれも結構ヤバイよ。ワタルの知能指数、微妙な線なんだよね。健常児としては。だからヘタすればクラス替えかも。中学だつて普通のところへ行けないかもしれないよ。

でも大丈夫。あたしがそんなことさせないから。絶対に

全部済んだ後で、彼女は俺を抱きかかえて髪の毛を撫でながらそんなことを言った。ついさっきまでの獣のような呻き声から、鍵を閉めて近づいてきたときと同じ猫撫で声に戻っていた。二人とも床

を転げ回ったので埃だらけだった。教室を出る際に「それと」と付け加えたのは、今のクラスに残りたいなら、普通の中学校へ進みたいなら、今日のことは決して誰にも話してはいけない、という大方予想したとおりの意味の言葉だった。

俺の初体験は公称二十一だが、実際は十一だ。それから後も俺はしばらく彼女の玩具になつた。生傷を親に気付かれないようにするために、それ以後風呂には一人で入るようになつた。それまでは両親のどちらかと入つていた。もう陰毛が生えかけていたので普通の子供よりは遅い方だと思う。隠しきれない顔の微妙な傷跡は母には「転んだ」と例の絶対ばれる嘘をついた。誰かにいじめられているなら正直に話して「こらん」と言われたときは、思わず込み上げてきたが泣くことすら出来なかつた。

わかるか？　この情けなさ？

でも、おかげさまでとうべきか、おあいにくさまととうべきか、奇跡的とうべきか、高校までは出られたよ。こんな俺でも、で、大して立派とは言えないかもしけないけど、こうして勤め人にもなれた。どうにかこうにかやってきたよ。今まで。

そんな話をすると女はしばらく俯いて黙り込んだ。

「やけにリアルね。……でも、それ、笑えない」

とだいぶ経つてから慣れない深刻な口調で呴いた。

当たり前だ。笑わそうとしてこんな話をしたんじゃない。あれだ。つい、口が滑つたんだ。墓場まで持つていくつもりだつた。この話は。それがあれだ。お前が相手だと氣を許しちまうのか、つい喋つちまうんだ。なんだつて。それに、今日がはじめてだろ？　お前が俺を家に呼んでくれたのは……。

俺は何も怖くない。あれより穢らわしい、忌まわしい、あれより下のことなんてこの世にない。俺はあれからまだ一度もあんな目にもあれに近い目にも遭つていない。

「ひとつ、聞いていい？」

ああ？

「その先生、どうなつた？ そのあと、捕まつた？」

「今、校長してるよ。同じ小学校戻ってきて」

許せない。女房とかならそう言つところだらうか。しかしこの女の口からそんな言葉は出ない。言葉の代わりにその口で俺の口を塞いで舌を絡め取る。いつもこればかりだ。俺としてもそんなに嫌でもないが。むしろ感謝している。なぜならこんな嘘の話に長々と付き合つてもらつたんだから。

掃除当番で遅くなつたとき教室の中から鍵を閉めたのも、俺の頬をしこたまはたいたのも、それからカー・テンを閉めたのも、最後に埃だらけになつたのも、クラス替えがどうの健常児がどうのと脅しをかけたのも全部本当のことだ。ただ、違つていたのはそれをしたのは男の先生だつた、ということだ。それも定年に近い、おそらく口の臭いオヤジだつた。俺があのとき教室で嗅がされ続けた匂いは、むせ返るよつた酸っぱい香水の匂いなどではなく、肥溜めより臭い腐臭だつた。

イボンヌ・エリマンは、俺の五年のときの担任だ。彼女が今校長をしてるのも事実だ。俺はイボンヌは好きだつた。あのとき彼女にそんなことをしてもらつていれば俺のその後は全く違つたものになつていたろう。六年の担任のその変態爺は、すぐ後によそでも似たようなことをやらかしたのがばれて穢になつた。むしろ過去何十年も表沙汰にならなかつたことが奇跡といつていい。余罪を追求する警察やら教頭やらにクラス全員が呼ばれた。何を訊かれても俺は口を閉ざした。だつてそういう。あんなことを平氣でしかす大人たちなど誰一人信用できるわけがない。正直に話したりすれば、どこで話が漏れて後でどんないじめに遭うかわかつたものではない……。

しかし俺もよく、ぐれたり籠もつたりせず、ここまで騙し騙しやつてこられたもんだ。自分で自分をホメてやりたいぜ。まったく。だからなるだけ日射しの緩い、凪いだ余生を送りたいと思つたつて、それはあながち贅沢とも言えないだろ？ どうだよ？ え

え？

それとヒカルだ。あいつは俺の生き甲斐だ。この世の汚いものは一切見せたくないし、嫌な思いや穢らわしい思いだって一切させたくない。俺の一の舞だけはどんなことがあっても御免だ。もしそんなことする奴がいたら、ハツ裂きにしても飽きたらない。

最後のくだりは一部適当に誤魔化して創作した。俺が話をし終えたとき、女の寝室の時計の針は一時を廻っていた。二回終わつた後だつたが、ますます目は冴えていた。女は何も喋らず、俺の頭を撫でた。

「まあ、忘れてくれ。つまらん話や。こつちは死んでも忘れられないけど」

「泊まつてくれ？」

「いや、帰る。関係を長続きさせるためには変わったことはしない方がいい。なるべく何でも今までどおりの方が」

俺は反射的に即答した。もし突然女房が戻ってきたら、という思いが頭をもたげ、そんな奇妙なセリフを俺に吐かせた。臆病なのは百も承知だ。そして卑怯なのも。何とでもほざけ。俺はその程度の男だ。所詮。万が一女房が戻つて来たとしても、俺が家に居さえすればこれ以上拗れはしない。どんなに遅く帰つても、とりあえず家で寝た方がましだ。もちろんその日、女房は戻つてなど来なかつたが。

女はパジャマ姿で、やはりちょっと不服そうに玄関先まで俺を見送つた。駐車場まではついて来なかつた。

たまたま早く帰宅した日、郵便受けを開けると、見知らぬ名前の人から俺宛の親展の手紙が届いていた。宛名は印刷ではなく手書きだった。そこには、過去の性体験の話は全部作り話であること、俺が初めての男であること、俺が好きであること、何か俺の役に立てるようなことがあるなら力添えしたいこと、あつかましいかも知れないが出来るなら女房と別れて俺と一緒にになってほしいこと、その

際子供は引き取つてもよいこと、などが回りくどく恥ずかしい表現を使って小さい字でびつしりと書かれていた。封筒の裏に書かれた差出人は男名前だったが、その筆跡は明らかに女文字で、便箋の末尾には、大変な口下手で思つてもいないことばかり口にしてしまう「どうしようもない馬鹿な女云々」と認めてあつた。

俺は一読すると即座にライターを搜した。水屋、電話台、流し台の引き出し、テレビ台、冷蔵庫の上。しかし煙草をやめてから随分と経つので百円ライターもマッチも見つからなかつた。オール電化の家はこんなとき不便極まりないと憤慨しているとき、表で車のエンジン音が聞こえた。女房がヒカルを連れて買い物から帰ってきた。手紙は慌てて丸めてズボンのポケットに入れた。ポケットが膨らんで不自然なので強く押して潰して平たくした。受け取つたのが偶然俺だからよかつたものの、えらいことをしてくれる本当にどうしようもない馬鹿な女だ。メールで済むじゃないか。メールで。

そうだ。俺は女房とよりを戻した。

いとも簡単に女房は戻ってきた。俺は里の親の元に行き、土下座をして涙を流して詫びることもせずに済んだ。あれだけ怒つて家を飛び出しながら、出て三日目の夜、俺が女のマンションから帰ると、普段どおり飯を拵えて待つっていた。理由は「明日はヒカルの幼稚園の入園説明会がある」というものだった。本当に丸三日、家を空けただけだった。女房は「やけに今日は遅いわね」と一言こぼしただけでそれ以上は何も言わなかつた。やっぱり泊まらなくてよかつた、と俺は安堵した。

車から降りてきた女房と入れ替わりに俺はちょっと散歩してくると言つて外へ出て、歩きながら女に携帯をかけた。

あの変な手紙はなんだ。ふざけるのもいい加減にしろ。お前は人の家庭をぶち壊すのか。あんなの冗談に決まつてるだろ。いい歳こいて、馬鹿か。恥を知れ。恥を。お前は言つたろう? 自分で。「冗談はよしこさん。ええ? どうなんだよ? 何だよ? 聞こえねえよ。ちゃんと人の話、聞いてんのかよ……。

そこまでは言わなかつたが、受話器が繋がると俺の口はそれと似たようなことをくつちやべつていた。

手紙、受け取つた。意味はわかつた。でも、ちょっとと考えさせてくれないか。やっぱり、前から言つてるようだ。厳しい。え？ そう。難しいということ。だから難しいんだよ。結論からいくと。こういうことはある程度きちんとしておかないとまずいだろ？ え？

聞いてんの？

俺の問いかけには何一つ答えずに女は黙つて受話器を置いた。多少の胸騒ぎがしたが、その沈黙に千金の重みがあることまで俺は気付かなかつた。女のその後の対応は素速かつた。

次の日、女は朝一番で校長室へ行き、何やらひとしきり喚き散らした後、事務室に入つてきた。俺はエクセルの計算に気を取られて全く気付かなかつた。背後に人の気配をかすかに感じると同時に、椅子の背もたれが何かに引っ張られて床屋のひげ剃り時のように大きく後ろに回転した。床屋と違つて椅子は地べたに届くまでに止まらず、俺は後頭部をしたたかに打つた。目の前にはさつきまでのパソコンのディスプレイに代わつて、天井に吊された蛍光灯が飛び込んできた。次に蛍光灯の代わりに俺の目の前に順番に現れたのは、白く長く太い脚、その上の赤いレザーの超ミニ、その奥の黒い下着、その上の赤いルージュをべつたりと塗つた般若のような女の顔だつた。女は倒れている俺を跨いでしばらく見下ろしてから股を広げて尻を俺の腹の上に乗せて胸ぐらをつかんで俺を抱き起こし平手打ちを往復三発見舞つた。右手の掌で俺の左頬を、甲で右の頬を、それぞれ三回ずつ時計の振り子のように正確に打つた。手の甲で殴られた右の頬は女の指輪にはまつていでかい石榴石のお陰でざつくりと切れた。

「そりいえば、こいつは一月生まれだつた」 呕嗟にそんなどうでもいいことが脳裏をかすめた。口の中も少し切れた。それだけ終えると女は立ち上がり、また俺をしばらく見下ろし、顔に唾を吐きかけ まともに目に入った 、最後に真つ赤なハイヒールの細い

踵で俺の喉元を踏みつけて　数十秒間息が出来なかつた　無言のまま背中を向けて部屋を出ていった。まわりに職員は大勢いたが、呆気にとられたのか面白がつたのか誰も止める者はいなかつた。このときの女はメガネをかけていなかつた

その次の日、書留の手紙が女房と俺宛に届いた。内容は一通とも同じものだつた。どちらも手書きで、ついこの前俺の家に届いた手紙と同じ筆跡だつた。ただし中味はまるで違つていた。俺がここだけの話だ、と断つて喋つたことが全部書いてあつた。ただひとつ俺の言つたことと違つっていたのは、イボンヌ・エリマンが男だつたことだ。女は俺の嘘を見抜いて内容を訂正してくれていた。誰がいつも撮つたのか、俺が言い逃れできないような写真も数枚添えられていた。

昨日限りで学校を辞めた女は、その日から兄夫婦と一緒に家業のうどん屋を手伝い始めた。

女房はヒカルを連れて再び里に帰り、今度は一度と戻つて来なかつた。俺は年度途中の異例の配置換えで別の学校に移つた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459d/>

犬の話

2011年2月3日02時16分発行